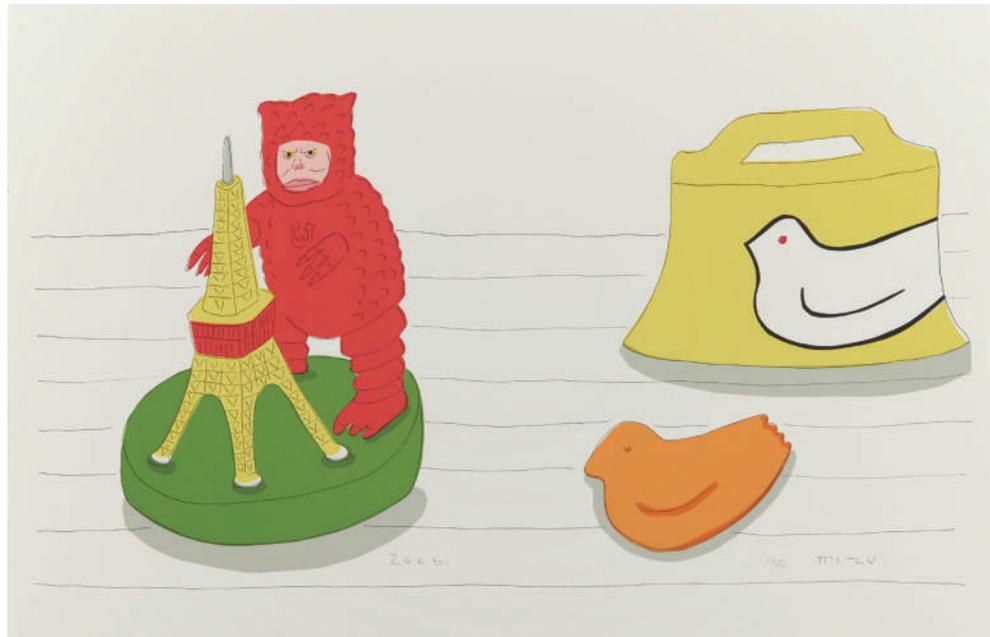




デ
コ
イ

2006年

- ㊦ 灯台 高さ21.0cm
 - ㊦ デコイ 木製 アメリカ 高さ8.0cm
- *デコイとは、狩猟でおとりに用いる鳥の模型をいう。
オブジェとしても用いられる。



東京タワー

2006年

- ㊦ M1号 東京タワーとガラモン ポリ塩化ビニル製 高さ20.5cm
 - ㊦ 鳩サブレ 9.0cm×12.5cm
- *鎌倉の銘菓・鳩サブレと、現在も変わらない黄色いパッケージ。4枚手揚げ黄色。

ぼくは国内外、旅に出る度にあちこちでブルーウィローを買い求めた。
—『安西水丸 地球の細道』エーディーエー・エディタ・トーキョー、2014年

ウィローパターンとは、1780年代初頭にミントン社創始者であるトーマス・ミントンが描いた図柄がはじまりだという。この中国風の図柄は、シノワズリ(中国趣味)が流行するイギリスにおいて大ブームを巻き起こした。ある二人の若者の悲恋物語(p.32～p.45で紹介)が図案化されている。

ウィローパターンの皿 19.5cm×19.5cm

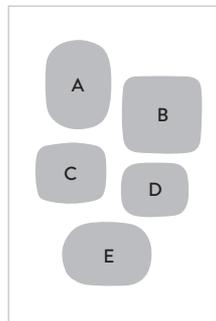


カレーが一番好きな食べもので、もしも「最後の晩餐で選ぶものは？」と訊かれたら迷わずカレーと答えるほどぼくはカレーが好きだ。それほど好きなカレーを食べるために購入した山根窯の器はぼくにとっては格式が高い。

——『鳥取が好きだ。水丸の鳥取民芸案内』河出書房新社、2018年

A D E：鳥取県・山根窯の器。この窯の器を水丸さんは「気負いがなく質実」であり「心を洗われる」と評した。Aはカレーを食べるため、Dは鎌倉のアトリエを彩るために飾られ、Eはパイプの受け皿として愛用された。B：熊本県・小代焼ふもと窯の器。スリップウェアは、民藝運動の時代にパーナード・リーチや濱田庄司によって日本に伝えられた。C：鳥根県布志名窯 船木研児(1927-2015)の器。葉巻の灰皿として使用していた。

スリップウェアの器



怪獣の魅力というのは、あれはいつたいた何なのだろう。ぼくは、ウルトラマンなどがTVで活躍した時代にはすでに大人になっていたのだが、それがこのところすっからはまってしまっている。

—『魚心なくとも水心』びあ株式会社、2002年

「ウルトラマン」「タイガーマスク」「レインボーマン」「人造人間キカイダー」などのソフビ人形。いずれも青山の事務所に飾られていた。

ソフビ人形 ポリ塩化ビニル製 高さ12.5cm～26.0cm



フィンスターさんのアトリエの敷地は広い。東京ドーム以上はありそうだ。そのなかにアトリエやギャラリーがあって、3分の2ほどが自らの手で作ったパラダイス・ガーデンになっている。池もあり小川も流れていた。庭の舗道には欠けた皿やびんなどが埋め込んであって、陽ざしにきらきら光っていた。

— 『a day in the life』風土社、2016年

天使を描いた作品。台座にはメッセージがびっしりと書かれている。水丸さんが初めてアトランタを訪れたのは1995年のこと。この時出会ったフィンスター氏の作品がきっかけとなり、帰国後『アトランタの案山子、アラバマのワニ』（小学館、1996年）という本を作ることに。

天使 板に油彩・サインペン 高さ24.0cm



いろんなことはあったが、ニューヨークでの広告シーンは、目を見張るものがあった。渡米する前から憧れていた広告アーティストたちの仕事が日常的に目に入ってくるというのがうれしかった。

—『手のひらのトークン』新潮社、1990年

本棚のひときわ目立つ場所に飾られているスノードーム。マンハッタンのシンボルであるエンパイアステートビルが中央にそびえている。約2年間ニューヨークに滞在した水丸さんがこのビルに初めて上ったのは、帰国の前日だった。

エンパイアステートビルのスノードーム 高さ9.0cm





文章の執筆は鎌倉のアトリエで、と決めていた。